

二〇一九年二月、清心館改修工事に伴う日本文学専攻・日本文化情報学専攻共同研究室の移転作業が始まりました。現在の建物は一九七七年の竣工以来約四十年間文学部の拠点として利用されて来たものですが、広小路キャンパス時代（一九五七年竣工）から起算すると、清心館は実に六十年以上にわたって文学部の教学を支えてきたこととなります。文学部が創立九十年余です。現在の学生、教職員はもとより、卒業生、旧教職員にとっても清心館は青春の、あるいは人生の一部と言っても過言ではないように思います。初対面の方と話していても、会話の中で清心館という名前が出た途端に相好を崩され、その方が文学部の卒業生であるとわかることがしばしばです。

日本文学専攻・日本文化情報学専攻共同研究室は二〇一九年四月から暫く海洋館六階に移り、ゆくゆくは啓明館に落ち着く予定ですが、文学部の拠点が改修後も清心館であることにかわりはありません。

このように長きにわたって文学部の

研究、教育に大きな役割を果たしてきた清心館ですが、やがて改修が成った清心館で私達は何をなすべきなのでしょう。清心館を拠点とした立命館大学文学部、とりわけ現在の日本文学研究学域につながる学問領域が長年にわたって日本の文学研究の進展に大きな役割を果たしてきたことは改めて記すまでもありませんが、国家レベルで文学部の存在意義が問われ、日本文学の研究がややもすれば軽んじられる風潮すらある今、私達は改めて立命館大学文学部九十余年、就中清心館六十余年の歩みに思いをいたし、先人の達成に敬意を表しながら、今後はそれをも凌ぐ高みを目指す気概が必要だと思えます。筆者が所属する上代文学や歌謡関係の学会や研究会では、指導的な立場の先生方から研究者としての人生を歩み始めたばかりの若いメンバーに至るまでが異口同音に文学研究をめぐる情勢を自嘲的に語っています。時代やジャンルを超えた学会の集まりである日本文学関連学会連絡協議会の場でも、かつて盛んだった中高教員の学会参加者が著しく減少していること、二〇二

二年度から実施される高等学校学習指導要領（国語科）で「論理国語」と「文学国語」が別科目として位置づけられたことなどへの憂慮が主たる協議課題となっています。

戦後の歩みと重なる清心館六十余年の歴史、それは文学研究を輝かせ、広く社会に発信し、人文学研究を志す者の求心力となってきた歴史です。文学研究をめぐる情勢がかつてないほど厳しいこの時期に清心館の改修が重なったことは単なる偶然ではなく、清心館で学び、研究してきた先人からのメッセージととらえたいと思います。文学研究を魅力的なものにし、活力あるものにしていくためには、教職員や大学院生のリーダーシップだけでは足りません。改修成った清心館では学部学生によって運営される学生部会が活気を取り戻すことを大いに期待したいと思えます。「清心館」という響きが今まで以上に卒業生・修了生の生涯の歩みを支えることとなることを念じます。

（藤原享和）